

なすなど少しの時間たりともむなしくしないといふことは新聞雜誌又は實際に彼の國情に通ずる方の報せらるゝところでございます日本婦人も繁雜な家庭に於きまして決て怠つて居ることは思ひませんが少し時間といふ觀念を明にして經濟的に使用せねばなりません。

我々日本婦人たるものはつとめて讀書もせねばなりません世の中の進歩は一刻も猶餘いたしません殊に將來世界の日本として他の列強國の間に立つて行くべき第二の國民を養成する婦人でございますから世の趨勢に従ふだけの覺悟はなければなりません裁縫調理にのみ没頭するいはゆる高等下女ではいたしかたがありませんが我國の今日ことに貧強國の名ある今日に於きましてせめて仕立賃なりとも節する様心掛ねばなりません。

家庭に於ける裁縫の必要は單に經濟的方面のみではムいせん精神上千金を費しても購ひがたき眞價を發見いたします何によらず左様であらうと存じますが客によばれて行つたと假定いたしましたようか前には山海の珍珠が並べられましても悉く料理屋の手によつてなりましたものでございましたなら美味いものは美味いとしかとれませんけれどもたとひ山海の珍珠はなく一汁一菜でムいまして主婦自らが手を下したまたは其指揮の下に出來上りましたものでムいましたなら食物の味以外に何物かの存在を感せずには居られません。

衣服も亦同様でムいませう皆様も御經驗がございませうがよく幼ない時分には新らしい衣服でも

着るとすぐお友達から『どなたがお縫ひになりました』といふ意味のことをたづねられますと私の

お母様とかお姉様とかと得意になつて答へたものでムいます勿論そこには新調の衣服といふうれしさもありませうがお母様とかお姉様とかといふ誇りもたしかにあることと存じます。

まして嫁たる人が一針ごとに誠心誠意をこめて縫ひましたといはれて着る舅姑の心地は何んなでせういかにむつかしい心でも其やさしい温情には自ら動かされまして報ゆるに笑顔を以てするといふ様になります従つて一家の平和を來す所以であらうかと存じます斯様に何れの方面から見ましても一通の裁縫を心得て居るといふことは大切でありますまして將來裁縫の報知として立つて行くべき私共は益々研究いたしまして斯道の發達をはからねばなりません。

美術上に現はれたる月

披二の四 水 民 年

望 月 つ 杉 本 ふ み

月といふものが藝術上に非常に多く現はされておりますことは、古今東西の、史上に於て見る所でありますか、此の月が美術上、殊に東洋美術の上に如何に現はされておるか、尙親しくこれ

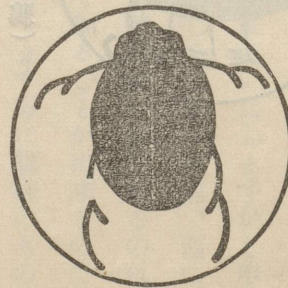
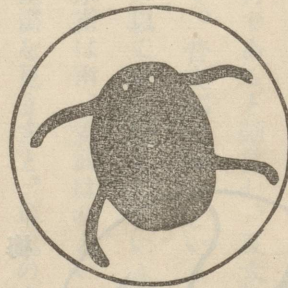
を日本美術の上に如何に現はされておつたかと言ふことについて考へて見たいと存じます。

今日日本に残つておりますもの、中で、最も古く月が現はれておるものには、法隆寺の金堂内にあります彼の玉蟲の厨子であります。此の厨子の壁畫には、日月が並び描かれておりますが、これによりますと、其の月には兔の様な形のもが現はれておりますし、太陽の方は三脚を有する鴉の様なもので描かれております。

これ等は共に或る家徴的なものでありまして、此れが依つて來つた所は、即ち波の明土なのであります。所で明土即ち支那に於ては、此の月を現しますのに、如何なる方法でなされたか、又如何なる意味で現はれておるかと申しますと、其の表現の重なるものに三通りあつた様に考へられます。そして其の表現をどうして知ることが出来るかと申しますと、支那の各地に畫象石といふものがありましてこれに刻みつけられてあるのでございます。其の中で最も古いものは蟾除と申します。

其の次には兔を以て現はされておるものがありますし、其の少し下つた時期になりますと、蟾と兔とで現はされておるものがございます。蟾も除も註釋によりますと「ひきがへる」とございませうが多分蛙の種類でありませう。けれども同じ蟾と申しましても、其の形にいろいろ變つたものがございませう。

孝堂山祠にあるもの



梅山里

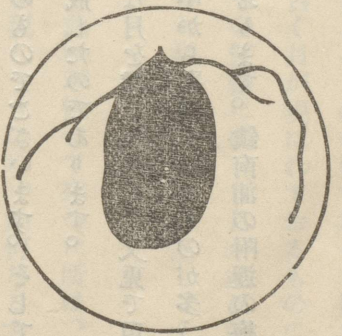
これ等は最も古い所のもので凡そ二千年も前のもののでございます。そしてこれが明土から朝鮮に入つて來まして、朝鮮に於ける古い藝術を形成したのであります。

それならば朝鮮に於ては何れの場所でも此の様な月を蟾で現はし、又兔で現はしておるものを見ることが出来るかと申しますと、それは古墳の中から發見されるものが多うございます。そして其の古墳の中の狩塚といふもの、壁畫に現れております。鎮南浦の附近の梅山里といふ所にあります。其のものは次の様な形で現はされております。

小室廟 闕



梅山里



梅山里



梅山里(陽鶉)



其の外平城附近の傍にある所の遇賢里方面の古墳中からも発見されたのであります。

これ等の兎なり蟾除なり又は太陽なりは、他の種々な畫と一所に、塚の石に刻みつけられたのであります。これをどうして月であると斷言し、又太陽であると推定いたしますかと申しますと、これには據り所がございます。昔支那に四神といふのがありまして、東に草龍、西に白虎、南は朱雀、北は玄武と定めて描き以て神に疑したといふ所から、草龍の描かれておるのは東、白虎の畫かれておるのは西、更に朱雀は南、玄武は北といふ風にして知ることが出来るのであります。所でこれによりまして其の壁畫を見ますと、草龍の畫かれております方に鶉様のものが描かれております(陽鶉と普通にいふ)ので、これは太陽の現れであらうといふことになり、又西白虎のあります方に、蟾を以て描かれておりますので、これは月を現はしたものであらうと想像されるのであります。其の畫象石に刻まれたものを見ますと、前圖の様な形をしておるのでございます。

斯様に月を現はしますのに蟾を以てするとか、又は虎を以てするといふ様なのは、外には其の例がないかどうかと申しますと、これは佛馬といふものでしばしば発見されることがあります。

佛馬の中に十二天といふものがありますが、其の十二天の中に月天といふのが御座います。この月天の像は月を持つておりますが、其の月は斯様な形に依つて現はされております。

日月天



下の鋸齒状のものは山を現はしたるもの、其の上は弦月に象りて山の端を出でし所、其の弦の上に兔をのせて以て月のシンボルとしたものでございます。これは例の兔系統から來れるものであります。

前これ等のものから考へますと、何れも月といふものを現はしますものには、寫實的な姿に於てはありません、即ち兔とか蟾除とか云ふ一つの記號で、又は符號で現はされております。即ち支那藝術、乃至印度藝術に於きましては、月をシンボリックに現はしておるのがございます。これが月を美術上に如何に現はしておるかといふ表現の一つでございます。

私等は時に月を稱して嫦娥と呼ぶことをきくことがございますが、これは昔の傳説から來つた

ものでありまして、古き支那に嫦娥といふ婦人が住んでおりましたが、夫がかくしおりたる不老不死の靈藥を盗みとりましたが逃れる場所がなくて、月の世界にはしつたといふ様なことが傳へられておりますが、これなどは意味の上の表現とでも申しませうか。

所が月を現はしますのに、さながらの姿で現はしておるものがあります。寫實的に現はされたものには、平安朝時代に多く見る所でございますが、これには満月を以て現はすのと、特殊な形即ち鎌形の月を以て現はされておるのとございます。

満月を以て現はされておるものには、彼の紫式部日記に「銀色の満月を現はして其の下で大宮人が遊んだ」といふことが書かれております、その他謠曲にも斯くの如き種類の月が現はれておるのを見ます。

謠曲「融」の中には、
 月もはや出汐になりて鹽が海の、浦さび渡る氣色かな
 陸獎は、いづくはあれど鹽竈の、うらみてわたる、

老が身の、よるべもいざや定めなき、心もすめる水のものに、照る月並を數ふれば、今夜ぞ秋の最中なる……

又「三井寺」の中には、

「——又今夜は八月十五夜明月にて候程に、雅き人を伴ひ申、皆講堂の庭に出で、月を詠めばやと存じ、類ひなき名を望月の今夜とて、今夜とて夕部を急ぐ人心、知るも知らぬも諸共に、雲を厭ふや兼ねてより、月の名頼む、月影かな〜〜」

又「木賊」の中には、

「刈るや木賊の言の葉は、いづれの詠めなるらん木賊かる、園原山の木の間あり、みがかれいづる秋の夜の、月影をいざ刈らうよ——」
など、あります。

又積極的な月の美を現はしたのも即ち月のブライイトの方面、輝の方面を現はしたのもあります。斯様な現はし方は彼の垂迹畫に於て見ることがしばしばございます。此の垂迹畫と申しますのは、神道に關係して現はれて參りました所の、一種の宗教畫でありまして其の、起因する所は佛畫でございますが、其の性質が日本の神に關係しております所から特に垂迹畫と申すのでございます。

足利時代の如き墨畫の盛んな時代にありまして、この輝ける月といふものを題材として、現はされておるものがしばしばありますが、けだし、此の時代に於ける考へは、以前より異つて參りましたことは當代の歌や、詩と平安朝時代の歌や詩の上に於て、知ることが出来ます。即ち平

安期時代では此の月を、金の様な考で取り扱つておりましたが、足利時代になりましたは、恰も銀色の様な氣分で取り扱はれたのでありました。それは平安朝時代の思想が唐朝から來たもので歎美主義であり、足利時代の思想は宗朝から傳はつて參りましたもので、何れかと申しますと議論主義であつたからでした。此の二個の考へは實に近世までも續いて來ておるのでございます。

次に月といふものを取り扱ふのに、月の特別の形に於てなされたことは前にも申しましたが、それは外でもございません、即ち弦月を以て現はしたのございます、古き所で申しますと、紫宸殿に「遠山有明月障子」といふのが描かれておることは、源平盛衰記に現はれておりますが、これなどは恐らく弦月を描いたものでござりませう。

其の外、藤澤道場寺にあります、一遍上人の繪所には、上人が加賀から逃れて來られる途中の夜の光景をゑがいたのございますが、これなどは月の淋しい一面凄き一面を現はすのに、用ひられておるのでございます、斯様なのは、足利時代になりましたも、類例が可なりによくございます。

要するに、月を現はしますのに當つて、月の輝けるサイトを現はすものと、月の凄い方面の姿を現はすものとの兩様が行はれておるのであります。

此等は何れも寫實的の意味に於て現はされておるのでありませう、所が、徳川時代を通觀して

考へて見ますと、各々畫家は月をいろ／＼の方面で現はしておりますが、殊に浮世繪の畫家に於ては、此の兩面を遺憾なく現はしておる様でございます。

徳川の下半期に於きまして長足の進歩を來した所の、浮世繪に於きましては、この方面を現はすことを最もよく致しております。

其の中で最も盛んな作者は、彼の廣重でございます。彼れの繪には、月の非常に輝けるサイトと、月の非常に淋しいサイトをを注意して、大さうよく現はしております。明治の畫壇で申しますならば、例の月岡芳年が「月百姿」といふ題目で、種々なる形を現はしております。

此の浮世繪の上に現はれ來つた月の二様の美の傾向を有効に利用しておる所のものは、彼の芝居の背景であります。即ち月夜の美しき光景を背景に使つて、そして華やかな情趣といふものを喚びおこさんが爲めに、輝ける月を出したのであります。そして觀者に月の美を力強く心に送らる、流し込まうとしておる所のものであります。

所がこれと反對な性質を用ひておることに就いては、例へば物凄い劇の場面に於て、しば／＼三日月形の月を出して、冷たい淋しい感じを賞觀者に送らうとしております。

これによつてこれを見ますとつまり月の二個のちがひは、遺憾なく劇の背景畫の上に發揮されておると云ふことが出來ます。

元來月の美といふものは、太陽の美とは異つております。月が圓滿であるといひましても、其の中には冷たい心持が流れております、冷たい心持は太陽の如くエキサイティングではなく、むしろサブデウィングの沈靜の情調をよびおこすものがございます。故にこれを歌人が形容しましても、「清い」と云ふ言葉を使ひます。或は「さやけさ」と云ふ言葉を使ひます。けれども之等の言落の中には一種のクルルの流れが漂ふております、冷たさとか、沈靜それ等を極端に強めて參りましたのが、三日月の様な凄い情調な月で御座います。

然してこれ等の精神に依つて來る所は、一は普ねく人々の魅せられる所の彼の月光の色で御座います。色の成分の中最も多く含まれておりますのは青色であります。青色は沈靜なる衰みなる信なる、平和なる、感情を喚びおこすものであります。更に其の二は、夜といふもの、聯想が月といふもの、觀念の底に流れておるのに依るので御座います。

要するに月象徴的に現はすのと、寫實的に現はすの二個の別がありますが、今から思ひますと二千餘年以前の、これをシンボライズして満足しておつた人々の心にも、又現在の人々の心にも等しく月は沈靜な、冥想的な姿として現はれておるのでございます。

以上